

特別寄稿

戦後の昭和歌謡
について

山形 俊男 (昭和39年機械科卒)



戦後の昭和歌謡は『リンゴの唄』で始まり『川の流れるように』で終る激動の時代であった。焼け跡と貧困の昭和20年代、奇跡の高度成長に湧いた30~40年代、豊かさの陰で心の喪失感が出て来た50~60年代。いつの時代も日本人の心に寄り添ったのは「歌」だった。

昭和という歌謡曲の黄金時代のヒット曲の中から、自分の独断と偏見で選び抜いた曲を取り上げて紹介したい。

それは“①自分の経験・体験 ②往時の世相・社会性の反映 ③作詞・作曲者の苦悩・苦勞 ④歌手人生の苦悩・苦勞 ⑤歴史を彩った名曲の秘話”の下に厳選したものである。

現代を生き抜いている私たちが、共に歌い、共に笑い、共に楽しい人生を送るために、これらの「歌」が、私たちの心の中に永遠に生き続けて欲しいと願わずにはいられない。

(1) 《丘を越えて》 歌【藤山一郎】 昭和6年

この歌は、私が出場した「第3回NHKのど自慢チャンピオン大会」のフィナーレで、出場者全員で合唱した曲だ。この歌を最後に緞帳(どんちょう)が下りて放送が終了した。

その後、審査委員長の藤山一郎が真後ろにいた私を見つけて、笑顔で「惜しかったね!ほんの少しの差だったよ!」と、わざわざ私に声を掛けてくれた。

放送中に出演者に声を掛ける事はあっても、通常はゲスト歌手ですら出演者に声を掛ける事はない。私は恐縮し切った事を今でも鮮明に覚えている。この曲だけ唯一戦前のものだが、この放送で合唱した「丘を越えて」は、私にとって忘れられない曲なので選出した。



筆者は民謡の歌手

(2) 《お別れ公衆電話》 歌【松山恵子】 昭和34年

昭和39年3月高校卒業を間近にして、卒業生は午前中だけの授業だった。帰宅路に級友と秋田駅前に来ると、呼び込みと思われる連中から声を掛けられた。「君たち暇かい?」良かったら今秋田県民会館で「松山恵子ショウ」をやっている。券をあげるから、「会場で盛り上げてくれ!」と言われ無料(タダ)券を渡された。どうせ家に帰っても暇なので級友と観る事にした。何かの手違いで地元興行主と揉めたらしい。このため1000人収容の会場が僅か約100人程度の観客で客席はガラガラだった。それでも流石(さすが)にプロ歌手である。予定されたプログラム通り、手を抜かず衣装替えと歌を最後まで歌い切って私たちを楽しませてくれた。松山恵子のヒット曲は数多くあるが、この歌を抜きには語れない。秋田県民会館で、数少ない観客を前にステージからわざわざ降りて来て、一人ひとり私たちの前で歌いながら握手してくれた事は、今でも忘れられない思い出になっている。この歌が発売された昭和34年交通事故で瀕死の重傷を負い、輸血した事が原因で肝炎を患ったが闘病は秘密で通した。しかしこれが遠因となって寿命を早める結果になったのは残念である。



平成30年5月31日で閉館となった秋田県民会館

(3) 《星の流れに》 歌【菊地章子】 昭和22年

「星の流れ」は、敗戦翌年の昭和21年8月29日、毎日新聞社に寄せられた一通の投書から生まれた衝撃的な歌だ。投書の文面は次の通り。「私はこの3月中旬、奉天(ほうてん)から引き揚げて来た。着の身着のまま、それこそ何一つ持って来られなかった。私は21歳です。奉天で看護婦をしていて今も免許状だけは持ってます」「顛落(てんらく)するまで」の見出しがついた投書は、50行のスペースを占めていた。投書の主は、生きる為によく見つけた待合で売春を勧められた。「私は驚いて、その場を風呂敷包み一つ持って飛び出した。乏しい金も無くなり旅館を追われ、上野駅の地下道に来了。ここを寝所にして勤め口を探したが、見つからず何も食べない日が2日も続いた。すると3日目の夜、知らない男が握り飯を2個くれた。私はそれを貪(むさぼ)る様に食べた。それ以来、私は『闇の女』と人から蔑(さげす)まされるような商売に落ちて行きました」

この投書を読み、深い憐(あわ)れみと憤(いきどお)りを覚え、「こんな女に誰がした」を一晩で書き下ろしたのが、田端義夫の「かえり船」などを作詞した清水みのりである。女を転落させた遠因は無謀な戦争にあった。その戦争の犠牲者として「闇の女」や「浮浪者」が続出して、彼女や彼等が町中に溢れていた。作曲はテイチクでディレクターしていた利根一郎が引き受けた。利根はギターを爪弾きながら、まず「こんな女に誰がした」の一節にメロディーをつけ、後は一気に3時間で作り上げてしまった。歌手は淡谷のり子に白羽の矢が立ったが、誇り高い彼女は「夜の女の歌は歌えない」と固辞したため、コロンビアから移籍したばかりの菊地章子に代わった。菊地は譜面を見て前奏がB♭調であるのに異を唱(とな)えたため書き改められ、曲名も「星の流れに」に変えられた。発売されると、奈良県の教育委員会から「パンパンの歌をレコードにするとは何か。止めるべきではないか!」と強硬な抗議を手始めに苦情が相次いだ。このためテイチク・レコードは何も宣伝せずに成り行きに任せる事にした。

当時東京だけで夜の女は、4万人はいると言われていた。街頭に付(た)たずむ女が4万人もいると言う事は、他の都市を考慮に入ると、夜の街でいかかわしい商売に身を委ねている女が、その何倍もいると言う事だった。歌は口づてに広がり、レコードもじわじわと売れ始め、24年には「こんな女に誰がした」の原題で映画化された。



新宿歌舞伎町辺りの夜景